

## 焼岳の火山活動解説資料

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

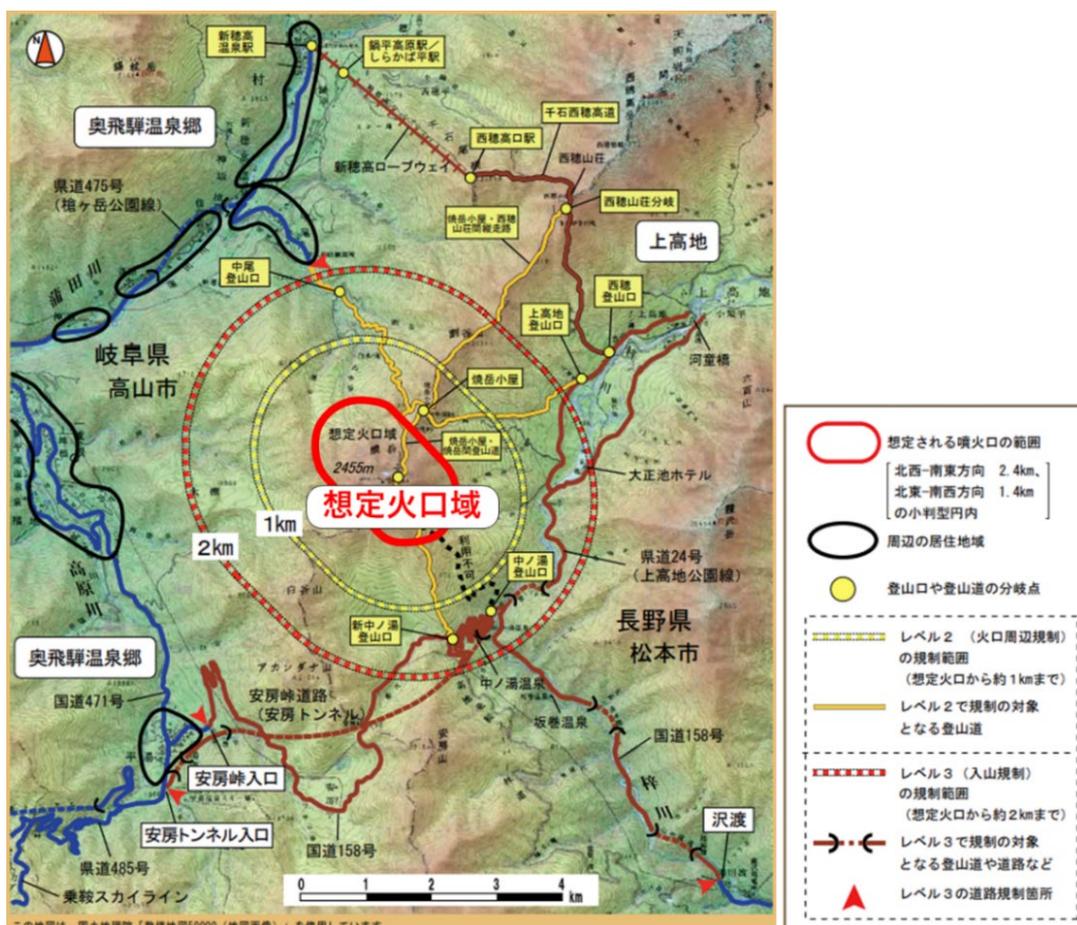
<噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ>

焼岳では、山頂付近を震源とする微小な火山性地震が1月25日から増加しましたが、その後減少し、2月以降少ない状態が続いています。

火山活動は低下しており、想定火口域から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、本日（4日）14時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

### 防災上の警戒事項等：

山頂付近を含む想定火口域内では、突発的に火山ガス等が噴出する可能性があります。登山する際は、火山活動の異変に注意するとともに、ヘルメットを着用するなどの安全対策をしてください。また、噴気地帯にはとどまらないでください。



この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、京都大学、名古屋大学、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

## ○活動概況

焼岳では、山頂付近を震源とする微小な火山性地震が1月25日から増加し、同日の25日及び27日には山頂方向上りのわずかな傾斜変動が観測されました。その後、火山性地震は少ない状態が続いており、火山活動によるとみられる傾斜変動も観測されていません。また、山頂付近の噴気の状態に特段の変化は認められていません。

これらのことから、焼岳の火山活動は低下しており、想定火口域から概ね1 kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、本日（4日）14時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。また、山頂付近の微小な地震活動は継続しており、焼岳周辺では数年おきに震度1以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられることから、中長期的に焼岳の火山活動は高まってきていますので、今後の火山活動の推移に注意が必要です。

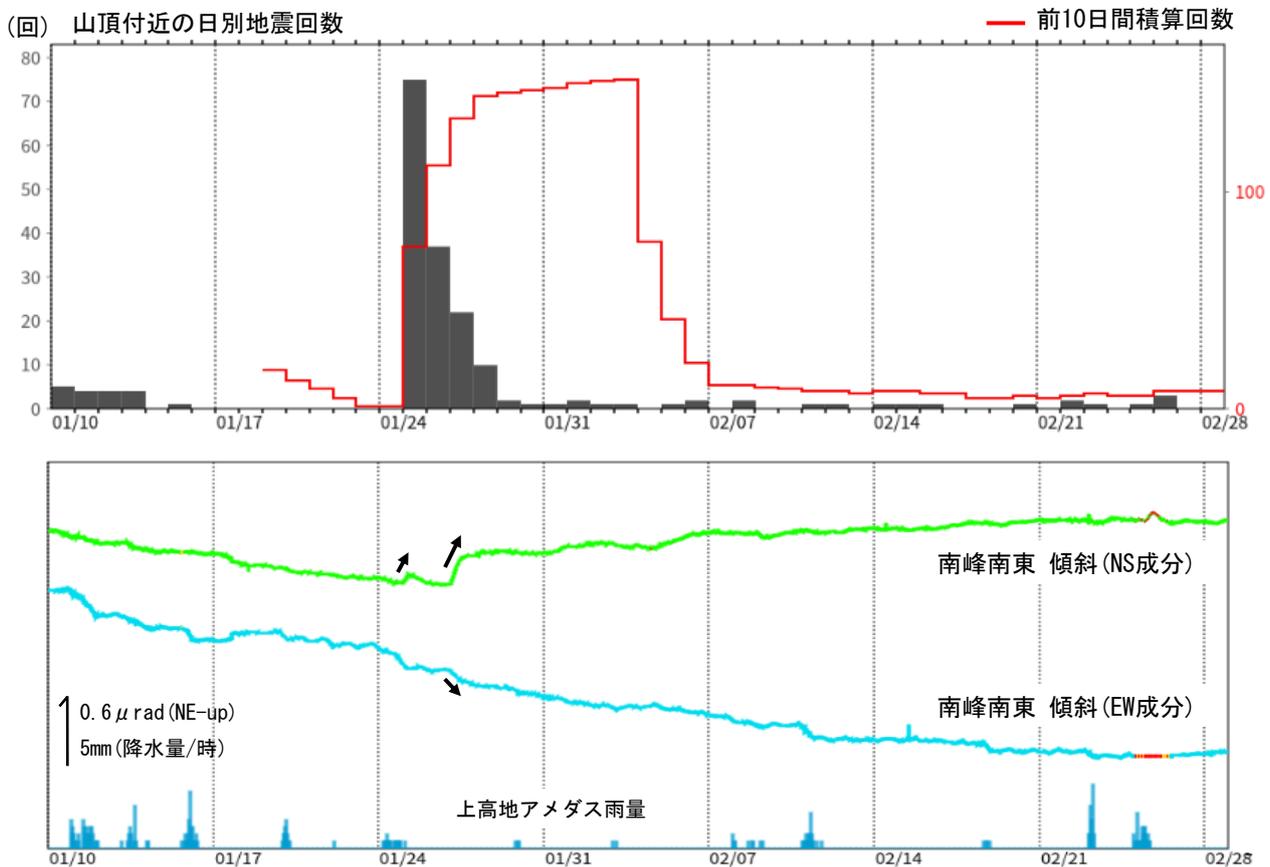


図2 焼岳 山頂付近の日別地震回数及び南峰南東観測点における傾斜データ（1月10日～2月28日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅  $1.0 \mu\text{m/s}$  以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。  
傾斜データの赤線は欠測を示しています。

- ・ 1月25日に山頂付近を震源とする微小な火山性地震が増加しましたが、その後減少し、2月以降少ない状態が続いています。
- ・ 傾斜計による観測では、1月25日及び27日に山頂方向の隆起を示すわずかな傾斜変動（黒矢印）が観測されましたが、その後、火山活動によるとみられる変動は認められていません。

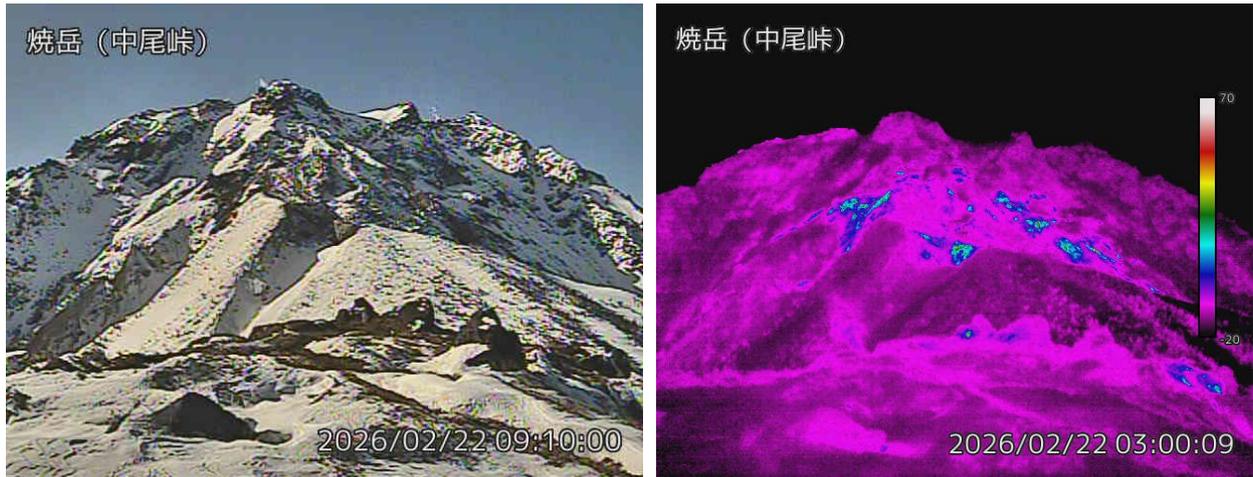


図3 焼岳 中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の可視画像（左）と地表面温度分布（右）  
撮影方向は図4を参照ください。

焼岳山頂周辺および北側斜面には噴気地帯や地熱域が認められますが、噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められていません。



図4 焼岳 噴気孔位置（青丸）

図中の緑矢印は、図3の撮影位置と方向を、また青矢印は図5の撮影方向を示しています。



図5-1 焼岳 山頂付近（北峰）の噴気の状態  
撮影方向は図4を参照ください。



図5-2 焼岳 山頂付近（隠居穴）の噴気の状態

2月24日に岐阜県の協力により実施した上空からの観測では、前回（2026年1月26日）の観測に引き続き、北峰南側噴気孔及び隠居穴噴気孔等で噴気が認められましたが、噴気や噴気孔周辺の状態に特段の変化は認められませんでした。



図5-3 焼岳 黒谷火口周辺の状況

黒谷火口では噴気は認められませんでした。前回（2026年1月26日）の観測と比較して、黒谷火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。



図5-4 焼岳 岩坪谷の噴気の状況

岩坪谷噴気孔では引き続き噴気が認められました。2025年3月14日の観測と比較して、岩坪谷噴気孔周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。

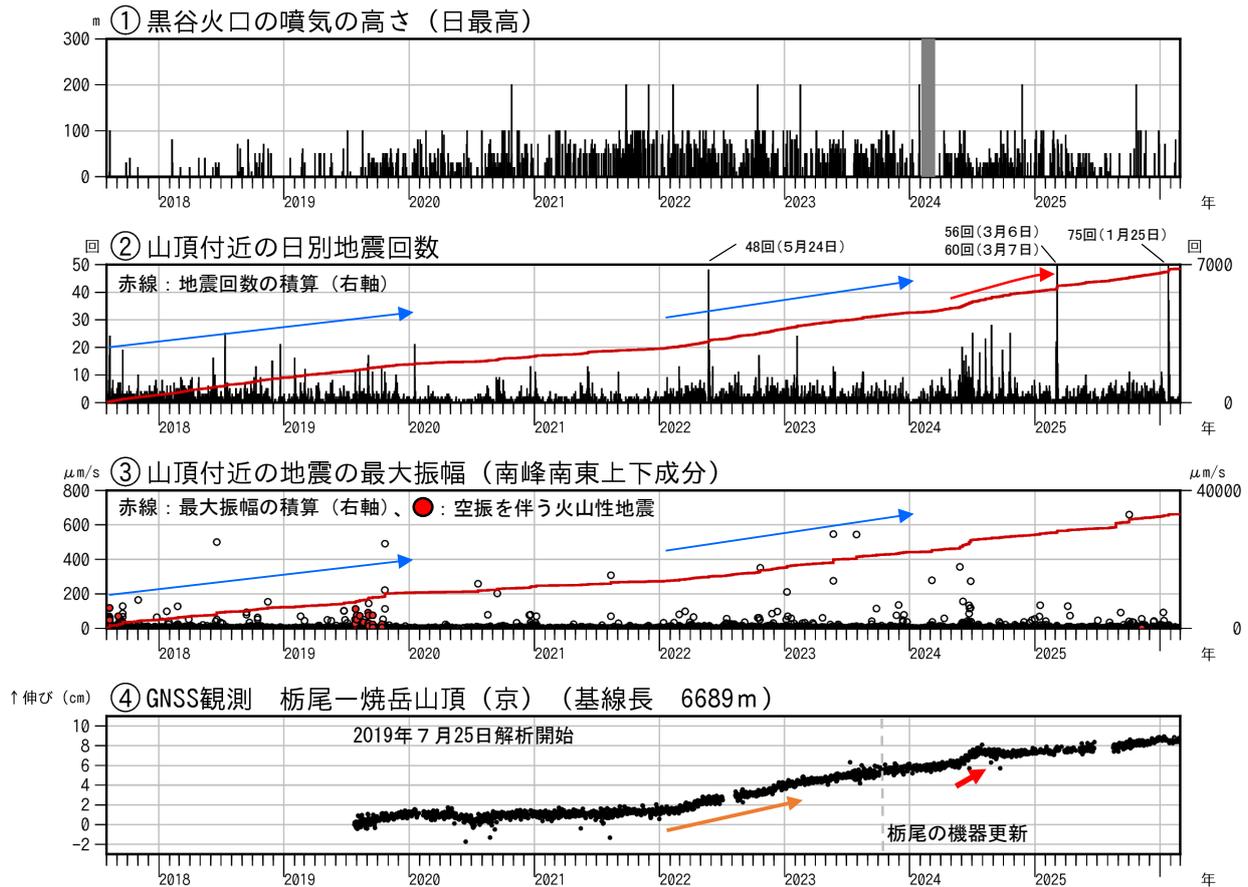


図6 焼岳 火山活動経過図 (2017年8月1日～2026年2月28日)

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅  $1.0 \mu\text{m/s}$  以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。

①灰色の期間 (2024年2月5日～3月14日) は欠測を示しています。

④は図7の基線③に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。(京) は京都大学の観測点です。

- ・黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えていきます。
- ・山頂付近の小さな地震 (焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震) が継続しています (②)。
- ・2022年1月頃から2023年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017年8月から2019年末の期間にみられた地震活動 (積算曲線の勾配) とほぼ同程度です (②③青矢印)。2024年5月下旬から2025年3月上旬にかけて、時々短期的な増加がみられました (②赤矢印)。2026年1月25日から地震が増加しましたが、その後減少し、少ない状態で経過しています。
- ・GNSS 連続観測では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が継続しています (④)。
- ・④の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂 (京) 観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました (橙矢印)。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました (赤矢印)。

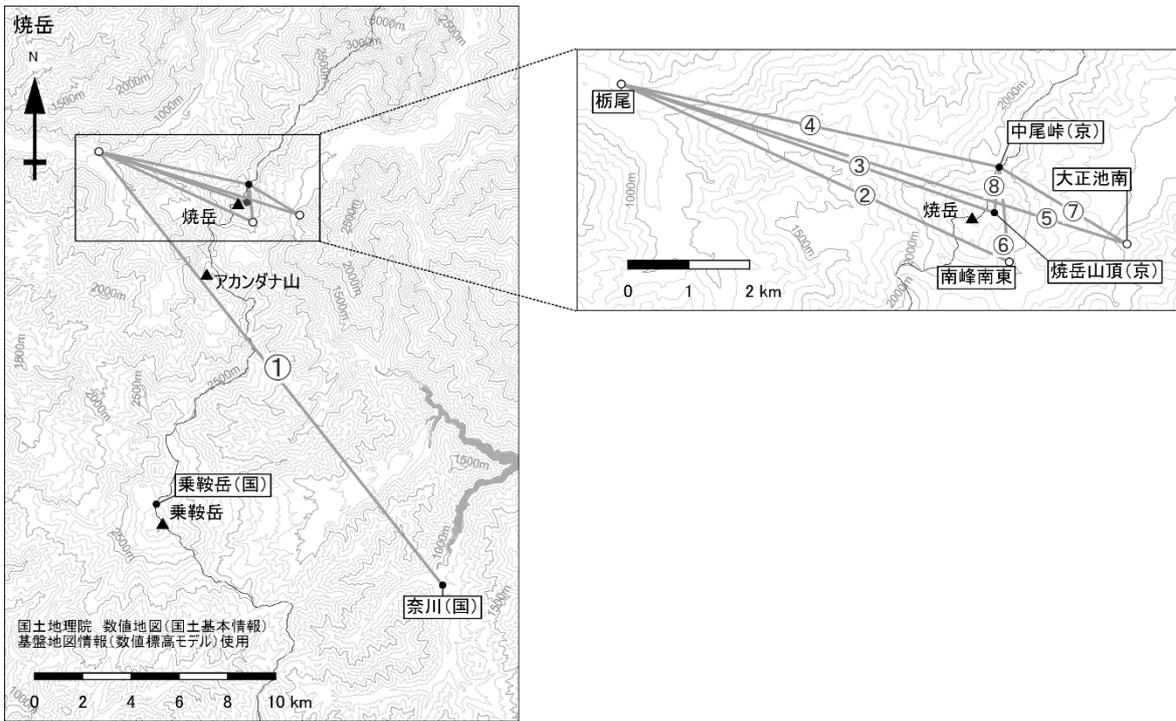
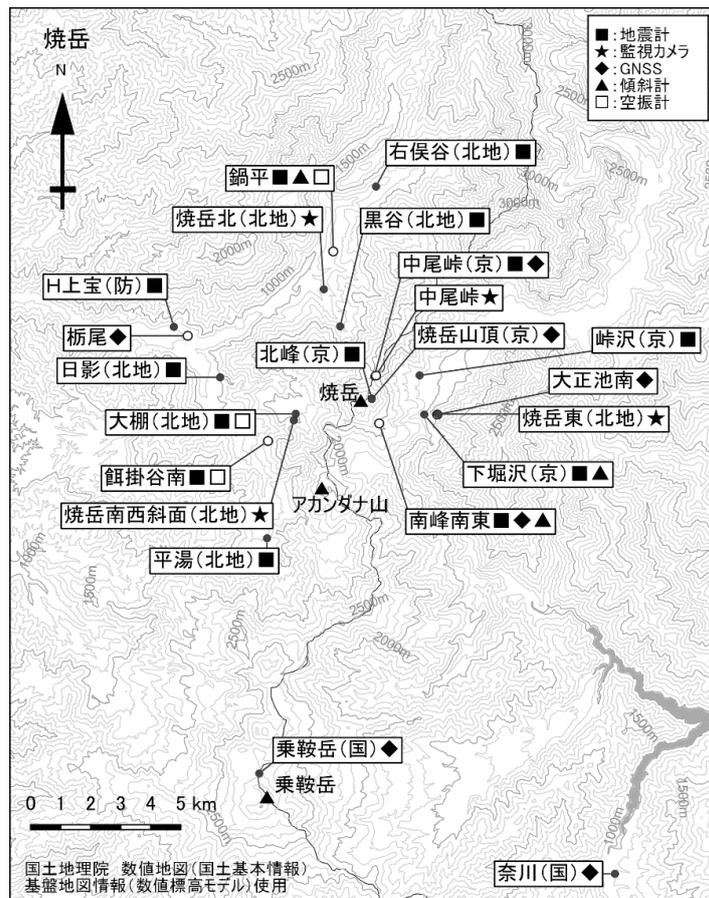


図7 焼岳 GNSS連続観測点配置

白丸(○)は気象庁、黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
③は図6のGNSS基線④に対応しています。  
(国): 国土地理院、(京): 京都大学



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(北地): 北陸地方整備局、(京): 京都大学

図8 焼岳 観測点配置

○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局